

キノコ体のレベルで止まっているような昆虫や軟体動物とが、同じ痛み感覚をもつとは考えられない。さらに、ヒトにもっとも近い霊長類、とくに旧世界ザル、チンパンジー、ヒトと比較してみても、よく言われるように、前頭前野の発達に関しては非常に異なっている。神経系の発達しない原生動物では痛覚は存在しないし、網状神経系の腔腸動物、神経葉の軟体動物、キノコ体の節足動物では痛覚反射がほとんどであろう。他方、脳、脊髓が発達した両生類、爬虫類、鳥類では痛覚反射以外に、個体として系統だった肉体的痛みを感じることができる。中枢神経系が高度に発達した哺乳動物では、肉体的痛みと精神的苦痛を感じる能力が発達する。とくに霊長類でも類人猿では、ヒトと同様に精神的苦痛を感じることが報告されている。

動物実験委員会の役割

自然科学の発展に対する盲目的な信頼や、科学

技術の進歩に対するアприオリな期待は過去のものになってしまった。近年ではビックサイエンスに対する、いわれのない恐怖や先端バイオ技術に対する生命倫理からの反発の方が目立っている。これは、科学技術の開発とその成果が必ずしもわかるように還元されていないこと、線型理論に基づく近代自然科学的解決法が、非線型な社会科学的現実問題に答えられなくなってきたことに、人々が気づき始めたからではないだろうか？動物実験委員会は研究者のオリジナリティと創造性を助けると共に、社会に対して承認した動物実験に関する説明責任をもつ、その意味でアセスメント（評価）、マネージメント（管理）とコミュニケーション（公開）の3つの役割を果たさなければならない。参考までに、実験の正当性の判断基準（表1）と、動物種別の苦痛のカテゴリー私案（表2）を載せておく。